

地域包括ケアシステム構築 へ向けた取組事例 ～鹿児島県大和村の取組～

住民が自ら考える互助の地域づくり

～自治体の概要～

鹿児島県大和村

●地域概況

奄美大島中央部に位置し、東シナ海に面したリアス式海岸と急峻な山々に囲まれた村。

「さとうきび発祥の地」であるほか、自然条件・地形条件等を生かした「すもも・たんかん」を主体とした農産物の生産及び加工品等の商品化に向けた取り組みを進めている。

●人口 1,641人

●高齢化率

65歳以上 37%

75歳以上 23%



特産品のすももとたんかん



きびの郷磯平パーク

住民が主体となった活動による地域づくり(大和村)

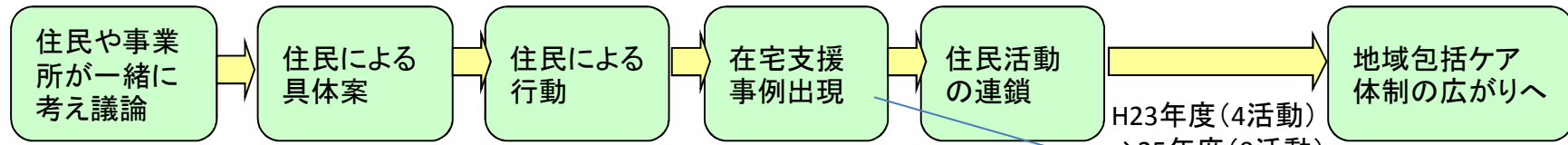
○ そこに住む住民自らが動かなければ暮らしたい地域はつくられない。住民が主体となった活動の展開にこそ、生きがい、役割、出番、楽しみがうまれてくる。そこに言葉をあてはめれば、地域版のデイサービス、サロン、企業、介護予防、健康づくり、世代間交流、自殺対策、閉じこもり予防・・・が網羅されていくということを、地域住民が教えてくれている。行政が形をつくるのではなく、ご近所を中心とした地域住民の営みからヒントを見つけ引き出す地域づくり。

23年度

24年度

25年度

地域支え合いマップづくり実施



野菜づくり支援と販売



近所の高齢者が作った野菜を使ったおかず販売



要介護者をマスターとして抜擢したご近所喫茶



集落民で手作り拠点

＜出現事例の一部＞

- * 一日中テレビをみていた人が畑づくりに精を出すようになった。
- * 閉じこもりの人が別人のように元気に明るくなった。
- * 孤独に過ごしていた人が近所のアイドルになった。
- * 自主サロンが始まった。
- * 困り事への気付きがひろがっていく。
- * たまった収入で今度は、高齢者のために道ばたにベンチを手作りしよう。

行政の役割

- 話し合いの場提供
- 住民と一緒に考える
- 動きを見守る
- 住民のもとへ足を運ぶ
- 住民への情報提供
- 必要に応じ財政支援
- 住民の動きを他に伝える

～取組の概要～ 平成23年度より開始

取組の経緯

(実施主体)

- 事業全体は大和村、個別の取組は住民が主体。

(背景・地域の課題)

- 全国平均を超える高齢化率。
- これまで家族や近隣住民が自発的に担ってきたユイ(※)が薄れてしまい、日常の困りごとが解決されないケースが増えてきた。
- 人びとの心の中にあるユイの心をはっきりと目に見えるカタチにし、誰もが気兼ねなく支え合う生活支援サービスの仕組みづくりが必要。
- 地域包括支援センターが事業を発案。住民主体の重要性を説くのに苦労。

※『ユイ(結)』とは、農作業など親族間やシマ(集落)で労働を提供しあう無償の行為。(『ユイワク』とも言います。)

(取組のポイント)

- 住民が自ら考えて、取組を行う。
- 地域支え合いマップづくりをきっかけに、住民主体の介護予防と生活支援の取組が連鎖。

取組に係る財源

- 地域支え合い体制づくり事業 (国10/10)
H23: 4, 762千円、H24: 1, 663千円



「だれもが最後まで家族と共にシマで暮らしたいと願う」

取組に必要なネットワーク・社会資源

- 住民有志組織
- 行政は住民と一緒に考え、必要に応じて財政支援

取組の効果

- 利用者（参加者）への好影響
 - ・ 外出意欲、閉じこもり解消
- 住民主体の活動が次々と連鎖。（H23：4つの活動→H24：9つの活動）
 - ・ 地域支え合いマップにより住民が地域の現状を認識、それに向き合い、仲間とともに考える課程ができた。
 - ・ 活動の参加者は徐々に増え100名以上に。
 - ・ 住民主体の取組から、さらに新たな取組が展開される。
 - 野菜づくりの支援とそれを使ったおかず販売。
 - その販売から、配達や見守りも発展。
 - 自主サロンが始まった。
 - 困りごとへの気づきがひろがっていく。



地域支え合いマップ作りの様子
住民・事業所など世代問わず参加



野菜づくり支援やご近所喫茶の活動

今後の展望・課題

- 住民同士の活動を個々から全体に繋げ、村一体となった活動へ発展させる。
- 総合的な地域包括ケアシステムの一翼となるように地域力を高めていく。
- 行政組織間の横の連携が必要。